はな

これはとりとめの無い漫談である。中央公論社の畑中氏が見えた時に何心なく漫談をしたのをそれを書いてよこせといふことになつた。その漫談を書いたのだからまづ漫筆といふわけである。

話はどうしたはづみか櫻にうつつた。どうしてさうなつたか覺えても居ないが、東京の櫻の事を聞きてゐるうちにつひ〳〵話がこんなになつたものか。それは櫻がわが國の花として珍重せられてゐるが、どういふ理由だらうかといふことに關してのことである。

花見といへば、櫻を賞美することであるやうに、古代から花といふと櫻をさしたことは著しい。それは櫻が日本の國の花として代表的のものであり、又櫻が日本人の性格の象徴としても見られるところから來るのであらうと思ふ。しかしながら、一體如何なる點が、日本人の性格の象徴として見られるのかといふ

と一寸答へ難いことのやうに思ふ。私はもとより完全にそれに答へうるものとも思はないが、少しく考へてゐる點が無いでも無い。「花は櫻木人は武士」といふ諺がある。これは假名手本忠臣藏などで人口に膾炙するやうになつたものだと思ふが、そのはじめは知らぬ。さうしてこれは花は櫻を第一とするといふことと武士は四民の第一だといふこととをたとへたまでのもので、櫻が武士と同じだといふことでは無いと思ふし、昔からもさう考へて來たと思ふ。然るに、近頃になつてはこの諺の本の意味をすなほに解釋しないで、或る特別の意味をもつてゐるものとして說く人が往々見えるやうだ。或る人の書に「此の山櫻の咲いたかと思ふと未練もなく散つて行く。古歌に『うつせみの世にも似たるか櫻花咲くと見しまにかつ散りにけり』とは名譽と氣節とを尊ぶ我が武士道の其精神と通ひ『花は櫻木人は武士』と謳はるゝやうになつた」と云つてゐる。かやうな說は相當に廣まつてゐるやうに思はれる。近頃或る事で歐人の文の譯だといふ次の文を見た。それは

櫻の花こそ日本人を觀察すべき時である。これその牧歌的哀歌的なる天性の最も明かに現れる季節だからである。日本の國民的の花は堅い硬ばつた魂なき凋むを知らざる菊では無い。絹の如く、柔かなる華奢なる芳香馥郁たる、短命なる櫻こそ實に象徵である。日本人はこの美しき花の、束の間にしぼみ、さうして散りゆく、その中にわが生の無常迅速の譬喩と我が美と青春とのはかなさを見るのである。櫻の花を眺めてゐる時、春の唯中に秋の氣分が彼の胸に忍び入るのである。

といふ文であるが、日本人が櫻を愛することは果してかやうな精神によるのであらうか。

櫻に關する歌は古來甚だ多い。又櫻に關しては古來多くの人がさまざまの感想を寫してゐる。それ故に、この某氏の言に似たこと、又この外人の言に似たやうな言を吐いた人は全く無いのではない。上にあげてある歌は古今集にあるのであるが、その集はその外に

殘なくちるぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ
いざ櫻我もちりなむひと盛りありなば人にうきめ見えなむ

と云つたのがある。これらは元來、落花を惜む情を根柢にしての歌であるが、上にあげた人々の考へに似たやうな點も無い譯では無い。又近世の歌に

君がためもれとをしへておのれまづ嵐にむかふ櫻井の里

とあるのは君が爲に潔く散れといふ思想を主として詠じたものであるから、上のやうな思想のあらはれであるといひ得ないとはいはない。しかしながら、ここに考へてみなければならないのは多少の例外は無いとはいはれまいが、先づ散るといふことはいづれの花にもある現象であつて櫻の特色であるとはいはれまい。それならば櫻の特色はその散り方の潔いのをさすのであらうか。しかし、散りかたの最も潔いのは

ほた〳〵と椿の落る朧月
稻妻のつまに落たる椿かな
落際に殘る念なき椿かな
散迄もちらぬけしきを椿かな

といふやうに、椿の花を第一とする。けれども昔からこの散りぎはの潔い椿を武士に比したことをきかない。しかしながら椿は散るといふよりは落ちるといふ語の方が適してゐるやうであつて、昔から御幣をかつぐ者共は忌み嫌つたことさへある。（その花瓣が普通の櫻の花の樣にばら〳〵になつて散る性質の椿には特に散り椿といふ名がある位であるから普通の椿の花は散るといはないで落ちるといふのである。）椿とはちがつた散り方をし、しかも最も鮮かな散り方をするのは罌粟の花である。罌粟の花は見た目も美しいものであつて、その罌粟畑の滿開の美しさは目もさめるほどである。さうしてその花は開くとすぐに花瓣が散つてしまふことは

けしちるや外の花には恥多し
似合しき芥子の一重や須磨の里
見ればはや葉にこぼれけりけしの花

などの句にもある通りであつて、誠に槿花一朝の榮よりもはかないものであるが、潔く散ることの標本としてこれに過ぎた花は無いかとも思ふ。罌粟の花は近世になつてもてはやされるやうになつたから、古歌の例は稀であらうが假名

手本忠臣藏の時代には盛んに俳諧などによまれたことは疑も無いのに、この散り際の鮮かな、しかも美しい花をば一向そんな例にもしないのはどうした事であらうか。

櫻の花盛りになると近世の日本人は花見といふことを催す。この花見には上にあげた人々のいふやうな點が少しも無いのはどうしたものであるか。しかもこれは近世だけでは無い。室町時代の謠曲にあらはれた花にしても又その前から連歌を花の下に催したことにしても、更に溯つて、鎌倉時代から平安朝時代にかけても同樣である。遠く花を尋ねては櫻狩を催し、近く庭の花を愛しては花宴を催した。源氏物語には卷の名にさへ花宴といふのがある。これらは決して花の散るについて心を傷ましめての催しでは無かつた。花の散るを惜むのは人世をはかなんでの事では無かつた。大江佐國が花を愛した執心のあまり蝶に化したといふ傳說にもさやうな傷心な態度が見られない。又平安朝時代から諸社諸大寺に櫻會（さくらゑ）といふ催があつた。これも、朝廷の花宴後世の花見と精神の通ふものであつたと思ふ。

私はかつて、櫻の會の機關である「櫻」といふ雜誌に櫻史といふものを數年にわたつて書いたが、つもり〳〵して、百頁足らずになつたが、それにも書いておいた通り、上にいふやうな花を感傷的にみるといふ方面の事は日本人としては例外とせねばならぬ狀態にある。吉野山に於いては「歌書よりも軍書に悲し吉野山」と云つた通り、感傷的の詩歌が少くないのみならず、それらは大にわれわれに哀れを催さしめる。しかしその感傷は花そのものの本質に導かれたものでは無い。吉野朝そのものの悲劇的史實を爛漫たる花に對して考ふる時に一層の悲哀を感ずるからであらう。卽ちこれは花そのものに悲哀がやどつてゐるのではあるまい。

櫻はやつぱり賀茂眞淵の「うら〳〵とのどけき春の心よりにほひ出でたる山櫻花」といふのが、日本人の魂にやどる櫻の本體であらう。本居宣長の「敷島の大和心を人とはゞ朝日に匂ふ山櫻花」と云つたのもそれと殆ど同樣であるが、日本人の魂そのものを逆に櫻花によつて說かうとしたものであらうが、これにも大した理窟は無い筈である。しかし、かやうな風に櫻を賞美することは

決して近世にはじまつたものでは無い。萬葉集の

青丹よし奈良の都はさく花のにほふが如く今盛りなり

は奈良の都を櫻に準へて讃美したものであるが、その櫻の美しさはまさしく眞淵宣長のいふ所のものに同じ美はしさである。

櫻は歸する所、上述のやうなことを以て美とも見られ又日本的の花としても賞せらるるのであると思ふが、然らば如何なる點が、日本人の魂にふれるのであるかと考へてみると、私はここに彫好が山櫻を賞美して八重櫻はことやうのものなりと云つたことを思ひ出す。八重櫻を異樣のものだといふ反面は卽ち「花はひとへなるよし」といふわけなのであるが、どうして一重の櫻を賞美して八重櫻をこと樣のものだとするのであらうか。ここに日本人の花に對する觀念の根柢がないのでないだらうか。櫻を賞美して花といふ。單に花といへば、古來櫻をさした。それはちやうど、太閤といふのは元來前關白をさす稱號であつたが、それが單に太閤といへば豐臣秀吉をさすものと思はれるやうなものであるが、その花といはれるものは八重櫻で無くて一重の櫻であつたことは著しいことである。清少納言の枕草子には「櫻は花びらおほきに葉色濃きが枝ほそくて咲きたる」ものをよいとしてゐる。これは花の大きなのを賞美したもののやうにも見えるが、しかし、又同じ人が「繪にかきて劣るもの」として「撫子、櫻、山吹云々」と云つてゐることも考へてみねばならぬ點であらう。

櫻を賞美するのに八重櫻は異樣のものだと貶して一重の櫻をよいとするのはどういふ理由があるのかと考へてみる。一個の花房だけについて見れば、一重の山櫻の如きものは瓣は五個にすぎず、色は純白といはれないけれど、先づ白いものといはねばならぬ。こんな花を一輪二輪繪にした所で何の美があらはれようか。一輪二輪だけ畫にするならば、寧ろ八重櫻の方がすぐれてゐるといはねばならぬ。然るに一重の櫻を賞美するのはどういふ理由かと考ふるに、これは多くの花が枝もたわゝに咲き滿ちるその全景の美にうたれるからである。その場合には一個一個の花を一々に吟味するのでは無い。枕草子に「枝ほそくて咲きたる」といふのは、花重げに枝もたわゝな有樣をば、賞美の條件に入れてゐるのである。一本の樹に於いてはまさに枕草子のいふが如き花でよいと

思ふが、しかし、枕草子の著者は恐らくは當時の櫻狩をしたことはあるまい。

櫻狩雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の陰にやどらむ

といふ歌は、平安朝の宮廷婦人には經驗せられぬことであつたらう。それ故に、清少納言は「花びらおほきに」と云つて山櫻よりも園藝種を賞美した。しかし、吉野山の花の美は山櫻の無數の林立して雲か霞かあやめもわかぬところにある。

吉野山霞のおくはしらねども見ゆるかぎりは櫻なりけり

といふのが、花そのものの極致である。而してこれを賞美するものの心は眞淵宣長の歌と同じである。これは決して一個一個の花房を賞美するといふことでなく、又一本二本の花樹の花盛を賞美するといふことでもなく、多數の樹木の集團によつての無數の花の集合の上に美がやどつてゐるものである。それ故に一つ一つの花を賞美するを要するやうな八重櫻は結局異樣のものになるのである。單瓣白色の山櫻の花を枝もたわゝにつけたものが無數に群をなして一抹の雲の如く霞の如くに見ゆるところにえもいはぬ美はしさがやどると思ふ。これがうら〳〵とのどけき春の心のあらはれであり、それに朝日がいさぎよく照り映えてゐる所に日本魂の美の象徴があるのだと思ふ。散りかたがどうのかうと云つてゐるやうな人は勝手にいはしておいて我々はわが日本魂の美をこの爛漫たる櫻の上に求むるであらう。さうしてそれは

花の雲鐘は上野か淺草か

といふごとく、西洋流の分析的の學問などではとてもわかりうべきものではないと思ふ。この美は一個一個の花を一々描寫してゐては幾十年かかつても吉野山の櫻など完成する見込もあるまい。そこにわが倭畫は雲や霞と同じ樣な手法で全體を描き、さうしてそれによつて櫻花そのものの大觀を與へるといふ手法を按出したのである。この手法をとらないときは櫻はいつでも「るにかきて劣る」ものである。

櫻の美は實に多くの花の集合した全體の上にあらはるる美である。これは一面からいへば、日本人の個人的の主張を十分に有しつつも、全體の爲には沒我の態度に出づる日本魂の象徴と考へられぬことは無い。日本人だとて菊とか

牡丹とか薔薇とかチューリップとか一個一個としてすぐれた花を賞美することを忘れては居ない。しかし、それらの花はやはり個人的の感想を伴ふことを免れない。國民的感情のあらはれとして、又國民的感情の同感しうるものは花の雲であり、花の霞である。これは沒我歸一の姿そのままの象徴であるといひ得ないことも無い。さうしてかやうなことはただ櫻に限るわけでは無い。躑躅の如き、山吹の如き、卯花の如き、萩の如き、みな集合的の美そのものである。これらを一個の花房について見るとき何人が、日本人のこれらに對する美感と同じものを感じうるか。われ〳〵日本人はかやうに花に對してだけでは無い。薄や苅萱や、一つ〳〵には見る影も無いものでもこの集合的大觀はめざましいものである。かくして紅葉も亦同樣の美感のあらはれである。而して、それらは皆大觀的手法を用ゐなければ、繪にかきて劣るものである。これらの花や紅葉の美を認識しうる所に大和魂的のものがあらはれるであらう。（中央公論昭和十三年四月號掲載）

日本精神と本居宣長

大和魂の眞諦

しきしまの大和心を人とはゞ
　朝日に匂ふ山櫻花

この歌はいふまでもなく、本居宣長の詠じたものである。これは日本精神をば朝日の前に咲きにほふ山櫻により象徴したものであるが、しかもこれは、自身の肖像の上に題したものであるから、宣長自身の心を詠じたものとも觀じなければならぬものであらう。

この歌につれて私がいつも直ちに聯想するのは賀茂眞淵の歌

うら〳〵とのどけき春の心より
　匂ひ出でたる山櫻花

と、谷川士清の歌

何ゆゑにくだきし身ぞと人とはゞ
それと答へむ大和たましひ

との二である。甲は櫻の花の麗はしさをたたへたもので、凡そ櫻の麗はしさをたたへた歌としてはこれほどのものは他に得られまじいものである。乙はいふまでもなく、大和魂の眞諦を語つたものである。この大和魂の眞諦と櫻の花の麗はしさとを兼ね備へたもの、これ卽ちこの大和心の歌であつて、これによつて日本精神の麗はしさを體得しうるものと思ふ。

櫻はわが國の國花だといひ、そして日本精神の象徴だともいふ。この考へに對しては、自分も同樣であるといひうる。しかしながら、櫻花がいかなる點において日本精神の象徴であるかといふことになると、近頃世に行はるる說には首肯し難いものがある。このことは私が既に論じた事もあるが、その櫻の花が潔く散るとか、或は武士道に一致するとかいふやうな理窟から說くといふことは眞の櫻花を認めたものとはいふことが出來ない。

近頃に至つては更にこれを歐米の最もこちたき理窟にかぶれて、ある歐人が「日本人はこの美しき花の束の間にしぼみ、さうして散りゆくその中にわが生の無常迅速の譬喩とわが美と青春とのはかなさを見るのである」と云つたのを賛成して、その意味で櫻が日本人の象徴だと云つてゐるものがある。これらは皆全く日本精神を知らぬものである。

日本精神を櫻に比するのは花の麗しさをもつて比するのである。これを道德觀から說いたり、哲學から論じたりすることは今の世に歡迎せられるかも知れないが、それは眞の日本精神といふものを考へて來ると賛同し得ないものである。道德または哲學を櫻に求めむとするときには附會の說以外に何物をも得ることがないであらう。しかるに、かくの如きことを敢へてするものがあるならば、その人は本居宣長の所謂こちたき漢心（からごころ）といふべきものであるが、今日の人人の弊はその漢心よりも一層こちたき西洋魂といふべきものであらう。本居宣長は漢心がわが國の教へ、また道をいたく害したことを歎いて

ひさかたの天つ月日の影は見じ

戎の意の雲し晴れずば
戎書のさ霧いぶせみ科戸邊の
神のいぶきの風待つ吾は

と歌つたのであるが、今の西洋魂の跋扈を見ては更に一層慷慨せられるであらう。凡そ漢學西洋學は皇國の道の羽翼臣隷としてこそ用ゐらるべきである。羽翼臣隷を主と仰ぐが如きは倒といふ外に何のいひやうがあらうぞ。この漢心、西洋魂を祓ひ去らずしては日本精神はさとられぬ事であらう。

古事記傳の精讀

そも〳〵櫻と本居宣長とは深き由緣のあることである。宣長の父は吉野の水分神に祈りて宣長を授けられたのだといふ。されば宣長は吉野にあこがれ、その山に詣り、且つ平素櫻を愛すること一方ならぬものがあつた。さうして、その歿後門人共は秋津彦美豆櫻根大人と稱へその塚の山に櫻を植ゑて師の志を果したのである。

櫻の山に鎭まります神より授けられた子たる宣長は眞に櫻の化身といふべきである。その歌に文に櫻に及べば一しほ力を込めて歌ひもし、作りもしたのである。それらの歌や文は一々これをあぐるに堪へぬが、それら多くの歌のうちで最も代表的なものは上の大和心の詠である。これは一面櫻の歌としても比類稀なるものであるが、大和心の歌としては最もすぐれたものといふべきであらう。大和心と櫻と宣長の三者一致して始めてこの詠ありといふべきである。

上の宣長の歌は櫻を詠じた歌ともいひうるものであり、しかして大和心を詠じた歌であることはいふまでもないが、それは同時に宣長の精神を詠じたものでもある。かくして、結局は櫻花の眞の美を知れば、大和心も宣長の精神も知らるべき道理である。然らば、この歌はいかに了會せらるべきであるか。宣長の門人にして養子となり、その家學を繼いだ大平が、ある人に遣した書翰に次のやうにいつたことがある。

朝日に匂ふ山櫻花の御歌、人人の問ふ處に御坐候。先師はたゞうるはしき

よしいひ置れたるのみに候。

ただこれだけでこの歌の眞意は盡きてゐるのではないか。我々は櫻に對してはただ「うるはしい」といふ一語で感歎するだけで、他の語を發し得ない。この際に、言を弄すれば、その言の多くなればなる程度に應じて感賞の念は薄らぐのである。日本精神、卽ち大和心もただ「うるはしいものだ」といふだけでよいのであらう。これをこちたき理窟で說明すれば、その委しさの程度につれて日本精神に遠ざかるものになるのであらう。

凡そ美を享受するのは理解を得ようといふのではなく、直感的に體得するのである。日本精神もまた言詮を絕したもので、直觀的に體得する外にこれを感受する方途はないので、これを說く時に、旣に第二義に墮してゐるのである。

日本精神と本居宣長といふ題を揭げてみると、この大和心の歌だけで澤山なものだといつてよからう。この歌をよく味讀して得るところあらばそれでよいはずであつて、それより外に言を加へれば、それは蛇足であらう。しかしながら、これだけではものたらぬといふ人のために姑く蛇足を加へて見よう。

本居宣長に見るところの日本精神といふものはこれをいかに說明しうべきであらうか。ある意味からいへば、宣長一生の研究は皆これ日本精神の闡明を目的にしたものだといふべきであらう。また宣長一代の著述は皆これ日本精神の記錄だといふべきでもあらう。更にまた宣長の全生涯これ皆日本精神の發露だといふべきでもあらう。しかしながらそれら多くの著述の中にもそれぞれ主とする點の差違によつて一樣には論ぜられぬもので、それら多くの著述多くの研究の一一が、隅から隅まで日本精神ばかりを說いてゐるとはいはれぬ。

最もよく宣長の精神を知るのには古事記傳を精讀すべきであらうが、その眼目とするところは直毘靈に述べてある。この書は宣長の信ずるところの皇國の道を說いたもので、そのいふところはわが國體の世界に類無く貴くすぐれたものであることを論じ、かくてこの國體のすぐれてゐるのは、要するにその基たる日本精神のすぐれてゐるのによることを說くといふところに重點をおいてゐる。

玉鉾百首は宣長が主張する皇國の道そのものを詠じたものである、以上の書

どもで宣長の思想は大體見ることが出來る。なほいはば「玉くしげ」がある。これは皇國の道を基として政治を行ふ心得を說いたものである。また馭戎慨言がある。これは外國に對して皇國の道の發動した迹を說いたものである。しかし、かやうに段々こまかく說き進めると、全著述をあげなければならなくなるからここらで止めておく。

道を行ふ心得

國體については直毘靈のはじめに委しく說いてゐる。かくして、この國體のすぐれてゐるのはその基たる道のすぐれて貴き故であることを說いてゐるが、この道はいかにして生じ、いかなるところに行はるべきかといふことについては玉勝間に

道は高御產巢日、神產巢日御祖神の產靈によりて伊邪那岐伊邪那美二柱の神のはじめ給ひ、天照大御神の受ケ行はせ給ふ道なれば必ス萬の國々天地の間にあまねくゆきたらふべき道也。

といつてゐるが、その道がわが國にのみ傳はつてゐる理由については

殊に皇國は萬の國の本、よろづの國の宗とある御國なれば萬の國々にわたりて正しきまことの道はたゞ皇國にこそ傳はりたれ。

と說いてゐる。

宣長はかくのごとく道の本來わが國に固有したことを主張した。しかるに、わが古典に道といふことを說いてゐないと論ずるものあるが故にこれに對しては

是ぞ上もなき優れたる大き道にして實は道あるが故に道てふ言なく、道てふことなけれど道ありしなり。

と說き、さうして

此道はこれ天下を治め國を治むる先務要道なることをしれる人はわれいまだ夢にも見きかず、いとも〳〵かなしき事ならずや。

と慨いてゐる。しからばその道は神皇の道にして臣子たる我々の道ではないのかといふに玉鉾百首には

天の下青人草の朝夕に
　御蔭とよそる道は此道

とうたひ、玉くしげには

人も人の行ふべきかぎりをば行ふが人の道にして、そのうへに其事の成と成ざるとは人の力に及ばざるところぞといふことを心得て強たる事をば行ふまじきなり。

と說いて道を行ふ心得を教へてゐる。さてその道を行ふわれ〳〵の心根はいかにあるべきかといふに直毘靈に

すべて何わざも大らかにして事足りぬることはさてあることそよけれ。

といひ、さかしらすることを深く戒め、ただ眞心のままに行ふべきことを强く主張する。玉鉾百首に

眞心をつゝみ隱してかざらひて
　僞するは漢の風俗
唐人の所爲ならひてかざらひて
　おもふ眞心僞るべしや

と詠じたのはこのためである。

宣長のいふところの大和心は要するに、この眞心そのものでありさうしてそれは極めて大らかにしてさかしらすることもなく、すなほに神皇の大道に服從ひ奉るものである。さうして、この道は國體にやどり存するものである。ここに國體とこの道と大和心とは三にして一に歸すべきものである。

宣長はその著述の上でも明かなるが如く、元來溫厚な人で激しい語を發せぬ人であつたと思ふが、その佛敎儒學のわが神皇の道を害したことに關しては痛論して寸毫も假借しない。かくて、その常にいふところは穢き漢意を去れといふことであつた。しかしながら漢意を去るといふことは容易のわざではない。それ故に宣長は

漢心直し賜へと大直毘神の直毘をこひのみ奉れ

と敎へてゐる。かくて直毘神の靈妙な發動を請ひ奉つたのである。漢意を嫌ふこともさることであるが、一層强く宣長をして憤慨せしめたものはわが國體

を賊する徒である。玉鉾百首に蘇我馬子及びそれに黨した人、また北條足利を叱責して假借することがない。更にまた承久建武の御世を回顧しては悲憤の涙にくれてゐる。

日本精神を有する本居宣長は熱血男兒である。學者としては冷靜明鏡の萬象を照すが如く、國士としては嚴肅、鋭刃の堅磐を裂くが如きもの、これ日本精神そのもののあらはるべき相であることを私は宣長に見る。

宣長の日本精神は春の日のうららかにして暖かなるさまに比すべき一面を有するが、また一面には秋霜烈日の如く邪惡を寸毫も假借しない潔白さをも有する。このうららかさと潔白さとはまことに朝日に匂ふ山櫻花の具有するところであり、しかしてこれ日本精神の眞諦である。

（昭和十六年一月朝日新聞掲載）

櫻の種類

櫻のことを六月號の雜誌に書くのは時節おくれである。しかし、筆者が之を起草してゐる時は伊勢でもまだ八重櫻の或るものは盛りであるし、仙臺の櫻も盛りの頃であり、秋田からは今櫻が眞盛りであるといふ通信があつた。それで私は今この題目を以て書いてゐるのは自分だけでは櫻にひたつた心もちである。

櫻は我が國に原生してゐる花樹であるには誰も異論は無いやうであるが、德川幕府時代におびたゞしく生じたあの品種は皆一の原種から變化して生じたのであるかどうか。恐らくは唯一種の櫻から生じたものではあるまい。最近の櫻の學者として唯一の人だつた三好學博士は、櫻を大別して山櫻と里櫻との二種とし、その山櫻は天然自生の櫻であり、里櫻は庭園栽培によつて生じた櫻とせられた。而して、山櫻をば、更に大別して白山櫻と紅山櫻との二種にせられた。

その白山櫻といふのは吉野山の櫻の如く本邦に最も普通なる櫻であり、紅山櫻といふのは東北地方から北海道の森林に多いものであるといはれた。この二種は天然自生の原種であるとせられてゐるが、それから變じて生れた天然品種も少くは無いのである。里櫻といふ名目は古は無かつたので三好博士が山櫻に對して區別する爲に新に設けられた名目である。これは上述の山櫻から化成したものであつて、庭園に植ゑられて傳はつたものであるといふことである。

さてこゝに櫻の品種について考へて見るに、山櫻の種類のうちにも既に多くの品種があるのである。ことに白山櫻のうちに於いて多數の天然品種があるといはれてゐる。紅山櫻には白山櫻ほど多くは無いやうであるが、それでもやはり相當に多くの天然品種があるやうである。さて里櫻について見ると、これは元來栽培によつて傳はつたものであるから、なかなか多くの園藝品種を見るのである。

以上櫻の品種は天然品種、園藝品種とさま〴〵であるが、その品種の數が時代によつて或は多く或は少くなつてゐる。私はこの事實に對して考察を加へて見たのであるが、その事を述べて見よう。

櫻にいろ〳〵の品種の在ることが考へられたはじめは、文獻には傳はつてゐない。平城天皇の御製によると、奈良の舊都に櫻が咲いてゐたのであるが、その御製にうたはれた櫻かどうかは明かでは無いが、奈良の都の八重櫻といふことは平安京の大宮人にもてはやされたのである。この八重櫻は天然のものではあるまいから既に園藝品種が在つたことは推定せられる。しかしそれが今の何であり又幾種類あつたかといふやうなことは明かにし難い。鎌倉時代になると、早櫻、遲櫻、八重櫻、四季に花さく櫻、絲櫻などいふ名目が文獻に見えるし、櫻の接木が盛んに行はれた記事が見えるから、園藝品種も大分生じたらうと推測せられるけれども委しい事は分らぬ。吉野朝時代になると、鎌倉櫻といふ品種があつて、殊絶の美花であつたことが傳はつてゐるが、後世桐ヶ谷といふ一品種は、鎌倉桐ヶ谷に於いて生じた園藝品種であつたらうが、それは室町時代にいたくもてはやされたものである。室町時代になると、普賢堂後に普賢象といふ信濃櫻、彼岸櫻、不斷櫻、氷室櫻、雲井櫻、人丸櫻などいろ〳〵の名目が見えるが、これらの

うちには品種の名目だけで無く、特殊の名櫻もあるだらうから、品種が幾つ知られてゐたかは明かでない。

江戸時代になると櫻の品種の記錄が盛んにあらはれ、隨つて品種の名目が、著しく多くなつて來る。その多くの名目を記載したのは恐らくは那波道圓の櫻譜を以てはじめとするであらう。これには十五の品目が載せてある。これに次ぐものは松岡玄達の櫻品であらう。これは六十九の品目が載せてあつて、櫻譜に比して五倍に近い數を示してゐる。之に次ぐものは寺島良安の和漢三才圖會の記載である。これは櫻の專書で無いから櫻品に比するのは如何かと思ふが、載する所五十三種で櫻譜の四倍に至らうとしてゐる。卽ち、この元祿前後に櫻の品種の著しく多くなつて來たことが知らるゝ。その頃「櫻づくし」といふ小唄があつて、三味線に合せて櫻の品種の名目を歌謠にした。その「櫻づくし」に謠つた品目は三十種に及んでゐる。これより後小野蘭山の花鑑、淺井圓南の花錦などがあるが、櫻の品目三十餘種であるから、多いとはいはれぬ。その後文化文政の頃になると、花譜の記載が最も盛んになつた。その著しいのは近江國仁正寺の藩主市橋長昭の花譜であつて、これに圖する所の品目二百三十四種に及んでゐる。文久元年に出來た信濃國須坂の藩主堀良山の芟譜（ジャクフ）はこの市橋の櫻譜に基づいて二百五十の名櫻を載せてゐる。それから久保櫻顚は希世の名花を集めて栽培したが、それを記載した長者ヶ丸櫻譜には總計百四十種に及んでゐるが、それは常人の喜ぶ八重櫻の類を除きて載せないのである。

以上の如く江戸時代に於いて、はじめ十五種位の名目しか知られてゐなかつた櫻の品種が、幕府の末造の頃になると二百五十種にも及んでゐる。然るに、明治時代に入ると、舊物破壞の思想に禍せられて、その品種は甚しく減少した。今江北の櫻として國家が保護してゐるものは七十八種に止まり、萬芳園にて編した櫻花品種集に於いては百十種に充たぬのである。

櫻の品種の多くなるといふことについて考へて見るに、天然品種は人間と沒交涉で增減するものだらうと思ふが、それが或る時代に多くなり、或る時代に少くなるといふことはどういふ譯なのであらう。天然品種として山に自生してゐる櫻が在つても、人間が之を認識しなければ、それは品種たることは分らぬ筈

である。卽ち天然品種は天然に自生してゐても、人間が認めなければ、それは人間社會から見れば、無いと同じである。それ故に天然品種でも、それが人間界の事項としてそれが多くなるのは人間の努力によるのである。園藝品種はいふまでも無く人間の努力による。そこで考へて見るに櫻の品種の多くなるのは日本人が櫻に關心をもつことの著しくなつた結果であることは明かである。さやうに考へて來ると、その品種の少くなるのは日本人が櫻を愛することの減少した結果であるといはねばならぬ。ここに於いて、私は櫻の品種の消長は一面日本人の思想の消長を物語るものであると思ふ。これによつていふと、今日よりも幕府末造の頃は日本思想が旺んであつたといふ事になるであらうか。けれども櫻だけでさやうな斷定をするのは大早計であらう。しかしながら、全く無關係だとは思はれぬ。（昭和十六年四月二十九日天長節の夕之を記す）

（文藝春秋昭和十六年六月號掲載）

櫻史索引

書誌名

あ

櫻花五百詠　二九四
櫻花三十六品帖　二七二
櫻花寫生　一八二
櫻花藪　一八二
櫻花袖鑑　二六七
櫻花圖譜　一八三
櫻花帖　一八三・二六七・二六九・二八五
櫻花譜　二八九
櫻畫帖　二七一
櫻史新編　三〇一・三三三
櫻譜　一八八・一八九・一九〇・二一三
櫻賦〔平野知秋〕　三三二・三三三
櫻品　二一一・二一三
亞槐集　一三九
飛鳥山賦　二六一
東鑑　九五・九六・九七

近江御息所歌合　六二
嵐山（謠曲）　一五三

い ゐ

石山緣起繪卷　九八・一〇〇・一〇一
伊勢參宮名所圖會　一六〇
伊勢物語　五六
一話一言　一九七
今鏡　五四
印明記　二二四

う

右近（謠曲）　一五三
鶉衣　二六二・二六三

え ゑ

榮花物語　五〇
江戸名所圖會　二三二
江戸名所花暦　二四〇・二四五・二四六
延慶本平家物語　六九

お を

翁草　一八六
大原山家記　一二八
大原野十花千句　一五〇
御湯殿上日記　一四五
小鹽（謠曲）　一五三

か

江北櫻譜　三五六
春日驗記　九八
賀茂祭繪詞　九八
借物辨　二六三
閑吟集　一五四・一七四
翰林五鳳集　一三二・一五八・一四〇・一四一・一四七
鵞峯文集　二二四

き

朽瓠子格物徵　二五七

宮中儀式略 三三六
季瓊日錄 一三二・一三三
北山殿行幸記 一三三
京鹿子娘道成寺 二三〇
京都坊目志 一八二
京羽津根 二〇二
擧白集 一七九
金葉集異本 四五
近世畸人傳 二六五・二七二
禁秘御抄 二八・三〇
玉葉 三〇
玉葉集 九六

く

國造本紀 一一
鞍馬天狗(謠曲) 一五三
花彙 二五七
廻國雜記 一五八
懷風藻 二五
花隱櫻譜 一八一
花壇全書 二一九
活所櫻譜 一二
花圖說 二九〇
花鳥曆 二九二
花譜 二九〇・二九四
觀櫻記 二四七
觀櫻譜 三〇八
還魂紙料 二三二

け

京城勝覽 二〇三
慶長見聞集 二一四
堯好法印日記 一二五
教言卿記 一四五
月堂見聞集 二四八
源氏物語 三五・二二〇
源平盛衰記 八二・八三
壎篪小集 三二四
玄與日記 一四一

こ

小金井の碑記 三三九
古今集〔古今和歌集〕 七・一八・四〇・四九・五三・五九
國史記事本末 三二三
古今著聞集 五八・六三・六六・六七・七三・七四・八三・八六・八九・九一
古今要覽稿 二二〇・二九〇
古事談 二七・二九
湖亭渉筆 二〇八
後撰集 五三・五九
五代帝王物語 九二
後奈良院宸記 一二五・一四三
後二條師通記 五四

さ

栽櫻記 三五三
西行櫻(謠曲) 一五三
西宮記 三五
催馬樂 六七
濟北集 一三九
「さかゆく花」の卷 一三二
作庭記 七七
「櫻」 一八二・三六九・三七一・三七二
櫻川(謠曲) 一五三
櫻會緣起 六一
櫻川志 三六四
櫻川事蹟考 三六四
櫻番付 二九二
櫻賦 三〇八・三二四
櫻之辯 二一一・二一二
實泰公記 一〇三
山家記 一七七
三花手控 二一九
三十六櫻譜 二八五
三十六人撰 一八四
三代實錄 五二
散木集 六三

し

蹴鞠簡要抄 七九
衆芳軒雜錄 二五七
志賀(謠曲) 一五二
詞花集 三八
十訓抄 四六・六五
集外歌仙 一八四・一八五・一八六・一八七
拾遺集 四一・五六
社記 二三八
沙石集 三八・三九
稱名院吉野詣記 一四二
諸國里人談 一六一
新葉和歌集 一一九
新儀式 三五
新古今集 一九・二〇・三九・五三・五六・八四・八六
新三十六歌仙 一八四
新拾遺集 八四
新千載集 六五・七五・七六・九三
新撰東京名所圖會 三四五
新編櫻花集 三五七
叕譜 二九三
神功皇后記 一〇

す

菅笠日記 二七六・二七七
助六所緣の江戸櫻 二三〇
墨染櫻(謠曲) 一五二

せ

旌櫻寺觀花記 三二四
勢陽五鈴遺響 一六〇
勢陽雜記 一六〇
昭代樂事 三五四
尺素往來 一二七
千載集 七一

そ

續近世畸人傳 一八五・一八七・二六六・二七二
續後拾遺集 八四
續後撰集 八四
續史愚抄 一〇三
續詞花集 六二
續千載集 八四
續日本後紀 二八
續門葉集 八九

た

泰山府君(謠曲) 一五二
體源抄 八九
醍醐寺雜事記 四六
太平記 一二九
瀧櫻記 三〇四・三〇六

ち

中古三十六歌仙 一八四
親長卿記 一〇五・一三六
竹林抄 一四一
長秋記目錄 六五
長者ケ丸櫻譜 二九三
長錄寬正記 一四七
塵塚物語 一三四—五・一三六

つ

積戀雪の關扉 二三〇
徒然草 七六・八五・一〇六・一〇七・一二五

て

朝野群載 四四
天狗雙紙 四六
天寶遺事 一七三

と

東海瓊華集 一四七
東國紀行 一五九
東大寺櫻會緣起 四三
東野州聞書 八一
德川實紀 二四二

な

長崎夜話草 二三六
長與宿禰記 一三七
成島道筑撰碑 二四四

に

西洞院時慶の日記 二〇一
二水記 一四〇・一四三
日工集 一四七
日本紀略 三四・三六・四四・五二
日本後記 三二
日本書紀 一〇
女房三十六歌仙 一八四

ね

年中恆例記 一四六

の

宣胤卿記 一三八

は

梅花無盡藏 五〇・一四七
佩弦齋雜著 三二四
八笑人 二四五
花爭(狂言) 一五四
花鑑 二五七
花圖說 二九〇
花錦 二五七・二五九
花之鑑 二八四

花折新發意(狂言) 一五四
斑鳩嘉元記 一二六

ひ

日次紀事 一九八・二〇二・二〇三・二二五
百錬抄 五四・七五

ふ

風雅集 六三・八三
袋草子 三八
富士見道記 一五九
藤澤道場繪卷 一〇〇
藤原光經集 六六
不斷櫻(謠曲) 一六二

へ

平家物語 六八—九
碧山日錄 一三六・一四四

ほ

北條家分限帳 二三二
寶物集 四九
北山抄 三五
法然上人繪傳 一〇一
發心集 四七
本草綱目啓蒙 二五七
本朝續文粹 四七
本朝無題詩 四九・六一
本朝文粹 三一・六〇

ま

枕の草子(枕草子) 五九・六〇・二六六
枕の山 二七八・二八〇
正子內親王繪合 六四
正廣日記 一五八
增鏡 八〇・九〇・九一・九二
松の落葉 二二九
松の葉 二二八
萬葉集 八・一〇・一三・一五・一六・二〇
二一・二五・二四・二六・四〇

み

密宗血脈抄 四五
水帳 二三二
都名所圖會 二〇二・二〇四

む

夢窓の集 一二三・一二四
紫の一本 二二八・二二九・二三〇・二三六

め

名花有聲畫 三二四
明月記 七八・八二・八四・八八
明治年中行事 三三五・三三六

も

藻鹽草 一四四
文德實錄 四二

や

洋々社談 三三四
野史纂略 三二三
山城名勝志 九二・一四一

ゆ
遊歷秘抄 七八
よ
雍州府志 二〇三
浴恩園櫻譜 二六四
吉野紀行 八一
吉野天人（謠曲） 一三三
吉野の栞 二六八
芳野賦 二三五
吉野百首 二七八
ら
蘭山十品考 二四七
り
凌雲集 三三
る
類聚國史 三四
ろ
六條道場繪卷 一〇一
わ
和漢三才圖會 一三八・一四〇・二三四・二三七・二三九・二四〇
和漢朗詠集 三七
倭花名品 一八三

人名

あ
櫻顧〔久保帶刀〕 二九一・二九二
秋里籬島軒 二〇三
安積覺 二〇八
朝倉義景 一四二
朝吹常吉 三六九
淺見絅齋 三一・三三〇
淺井圖南 二五九
足利高氏 一一四・一一三・一四六
足利高經 一一三
足利直義 一七〇
足利義昭 一四二
足利義滿 一三三・一三四・一三五・一三八
飛鳥井中將 一五〇
飛鳥井雅章 八一
飛鳥井雅經 八〇
飛鳥井雅康 一八六
厚見王 二三
跡見玉枝 三三一
穴山義平 九九・一〇一
粟田在衙 三三
粟田久盛 一一六
安倍午生 二六〇
安倍季春 三〇五
有栖川宮 三〇一
在原業平 五七・二三九
有馬凉及 一九〇・一九一
荒磯命 一一
青山延于 三三三
青山延光 三三・三三四
青山延壽 三三四
安法法師 三三
い
池原以文 二九五
池原香穗 二三八・二三九
池田正式 二五一
石川丈山 一七六
石倉重繼 三六四
伊志田友方 三四一
磯貝靜藏 三三九
伊勢大輔 三八
一條天皇 三五・三八
一條兼良 一一七
一條行房 一〇九
市橋長昭 二六九・二九〇・二九一
一休禪師 一八五
和泉屋甚助〔太申〕 二五三・二五四
伊藤東涯 二五〇
伊藤篤太郎 三六五
稻生若水 二一三
磐龍六雁命 一一
岩倉三位 二六九
巖谷季雄 三六九・三七一
磐余若櫻宮 九
磐余稚ノ櫻宮 一〇

飯島平藏　三一六
飯田巽　三四五
今尾景年　三六七
家定〔木下〕　一七六
色川三中　三一七・三一八・三一九
允恭天皇　一二・一五・二三
苗代兼載　一七四
井上蘭臺　二五四
井下清　三五八・三七一

う

植木八三郎　二六九
牛若　一五三
宇田川總兵衛　三四〇
宇多天皇　三四・四四・二〇三
有智子內親王　三二
內海內務大臣　三三九
采女朝臣比良夫　二五・二六
上野岑雄　四九・五〇・一五二
卜部兼好　八五・一〇六
雲虎和尚　二三三

え ゑ

映丘　一〇一
英帖　一五一
延壽　三二四
圓融天皇　三五・五〇

お を

お秋〔秋色〕　二三一・二三二
奧田竹松　三六九・三七一
尾崎斑象　三五三・三五四
尾崎行雄　三五九
織田信長　一六六・一六七・二二六
織田瑟々女　二六九・三三一
弟姫　一二
大江佐國　四四・四六・四七・六一・六八
大江朝綱　四七
大倉喜八郎　三四一
大竹多氣　三五七・三六二・三六四
大田南畝　一九七・一九八・二六二・二六三・二六九
大塚幾藏　三四五
大塚とう子　三四六
大伴池主　一八・二四
大友黑主　一五二・一三
大伴旅人　九・一五・一六
大伴家持　八・九・一〇・一五・一七・一八・二二・二四
多政方　六八
大橋重省　三七一
大炊御門經久　三〇四
大政所〔高臺院〕　一七七
大海原尙義　三四五
大村由己　一七〇
大目寒玉　二三一
小山の五郎　一一一
恩田技師　三五九
岡澤侍從武官長　三三九
岡中惟中　二三三
小川土佐守　一七二
岡部長職　三四七
小澤敏行　三〇二
小野老　一〇
小野蘭山　二五七・二五九

園城寺左馬助　二二二

か

孝謙天皇　四三
康哉　三一六
高臺院〔大政所〕
河野鐵兜　一二〇
孝明天皇　三一〇
香山益彥　二〇二
柏木右衞督　二二〇
膳ノ臣余磯〔稚櫻部の臣〕　一〇・一一
歌仙女　二一七
勝安房　三一四
勝俊〔木下長嘯子〕
加藤清正　一七四・一七五
狩野探幽　一九七
狩野芳崖　三一六
狩野蓮長　一八四
川崎平右衞門　二四六
川田小一郎　三四六
河田迪齋　三〇四
川村曼舟　三六八
貝原益軒　二〇三
龜山天皇〔上皇〕　九〇・九一・九三
加茂季鷹　三〇四
賀茂成助　四四
賀茂眞淵　二二五・二七五
賀茂成經　四五
菅家〔菅公〕　三四・一三六

き

其角〔晉子〕　二三三
菊池寂阿　三〇七
菊地芳文　三六八
北澤正誠　三一四
北政所　一七一・一七二・一七六
北畠玄慧　八九
北畠親房　一一五
北村季文　二八三・二八五
木戸玄齋　一八五
木下長嘯子〔勝俊〕　一七六・一七七・一七九
一八五・一八八
紀貫之　五九・六九
紀友則　四〇
清浦司法大臣　三三九
玉瀾　二五二
金太〔增田繁亭〕　二九二・二九三

く

草川次榮　三〇五
屈原　三一二・三一三
久邇宮殿下　三三九
國信　六五
桑名技師　三五九
久米女郎　二三
グラント　三六一
栗原信秀　三二二
黑主〔大友〕
光孝天皇　三四・二〇三
光格天皇　三〇五
光嚴院　一二四
光明皇后　四三
臥雲山人〔瑞溪〕　一二二・一三八

花山院大納言 二七〇
觀世喜之 一六二
桓武天皇 二七・五六・二〇一

け

契冲 三一六
月湖 二六五
兼好法師〔卜部〕
源九郎義經 九五
玄哉 一五〇・一五一
玄旨 一七〇
玄仍 一五〇
元政 一三二
顯昭 六三

こ

小出燦 三四六
小出侗齋 二六二
蒿蹊〔伴〕 二六五・二六六・二七三
勾當の內侍 一一五・一一六
浩然〔坂本〕 二九一・二九三
兒島高德 一一二・一一三
木島櫻谷 三六八
木花之佐久夜毘賣 七・二一〇
近衞學習院長 三三九
小松彰 三一四
小室翠雲 三六八
コリンウド・イングラム 三六二・三六三
惟明親王 八四
惟喬親王 五六・五七
惟宗孝言 四七・六二
近藤芳介 二〇二
金王丸 二一八
後宇多院 九三
後京極院 七六
後京極攝政良經 八四
後光嚴院 一三一
後小松天皇 一三三
後醍醐天皇 五〇・六七・七六・九一・九四・九九・一〇三
一〇九・一一四・一一六・一六八
後土御門天皇 一〇五
後堀河天皇 六七
後水尾天皇 一八一・一八三・一八四
後村上天皇 一一八
後圓融院 一三二

さ

サア・アーネスト・サトウ 三四七
西園寺公經 八四・九〇
齋藤拙堂 九三・二二一・二二二・二二三
西行法師 七〇・九四・一二八・一七八
阪谷芳郎 三六九・三七一
阪田三七郎 三四〇
嵯峨天皇 六・三二・三三・三六・四二・二一〇
坂上瀧守 二八
佐川田昌俊〔喜六〕 一八四・一八六・一八七
二三五・三一一
〔坂本浩然〕
佐久間象山 三〇八・三一〇・三一二
三一三・三一四
佐久良東雄〔良哉〕 三一五・三一六・三一八
三一九・三二〇・三二一
櫻戸玉緒 三二九・三三〇・三三二・三六六

櫻ノ兒 一三・一四・一九
櫻町中納言〔成範〕 一五二・一五七
櫻井雪鮮 二八九
佐々木氏信 九七
佐々木親秀 一二三
佐々木道譽 一二九
佐白米命 一一
佐々十竹 二〇七
佐藤一齋 二四七・二八九
佐藤正興 三四六
寶氏 九〇
寶方 五〇
佐原菊塢 三四〇
三條西公條 一六七
三條西實隆 一三九
三條西大納言 一五一
三寶院門跡 一四八

し

秋色〔お秋〕 二三一・二三二
式子內親王 八四
重明親王 二八
時慶 二〇一
シドモア女史 三五九
柴野栗山 二八三
芝山權中納言 二七〇
斯波義重 一三五
澁澤榮一 三七一
澁谷是入 二一八
島津孫四郎 二二二
島男也 三一九
清水謙吾 三五三・三五五・三五六・三五七・三六三
昌叱〔里村〕 一五〇・一五一
昌琢〔里村〕 一八五
上東門院 三八
聖武天皇 四三・一六〇・一六四
淨名寺關白右大臣 八三
朱雀天皇 三五・五二
朱舜水 二〇七・二〇八・二〇九
俊成 五六
順德院 六六
淳和天皇 三四
松花堂 一八五
稱德天皇 一六〇・一六四
稱名院公條 一五六
白河法皇 五四
白井光太郎 三六五
晉永機 三四一
心敬 一四一
心前 一五一
晉子〔其角〕 二三三
新庄維齋 一七二
新庄東玉 一七二
神功皇后 一〇
新待賢門院 一一七

す

菅原文時 三六
菅原道眞 三一
杉原榮三郎 三六九・三七一
杉本光貞 二三三
杉山復堂 三一七
資季 七五・八四

すけなか　九一
助六　二三〇
鈴木華邨　三六八
崇德天皇　三七
角倉氏　一九一
瑞溪〔臥雲〕

せ

青蓮院宮　一二六
清和天皇　五二
照高院道澄　一五〇・一六七
紹巴〔里村〕　一四九・一五〇・一五六・一五九
　　一六〇・一六八・一七〇
肖柏　一四九
關雪江　二三一
宣祐法師　一五七
錢宇文　一八二・二七〇
瞻西上人　四五

そ

宗祇　一四九・一五九
宗仍　一五〇・一五一
宗碩　一四四
宗長　一四九・一五九
宗牧　一五九
素性　五一・五三・五八
衣通姫　一二・一三・一四
園女〔知鏡〕　二三三・二三四
染殿后　五九
徂徠　二二五

た

大雅　二五二
醍醐天皇　三五
道興准后　一五七
道風　一七八
道本　二九七
隆兼　九八
高木孫右衛門　三五二・三五五
高木彌太郎　三四八
高辻中納言　二五四
孝時　六六
尊良親王　一〇四
高橋氏　一二
高橋多一郎　三一九
高橋蟲麿　三三
高平全權大使　三五九
隆光　九八
竹井澹如　三四八
武田義甫　二九五
武田信堅　一四二
忠度　七一
忠通　五四
田邊浩　三六九
谷口香嶠　三六八
谷文晁　九八・二八四
爲教　七五
爲村　二四〇
タフト夫人　三五九
田安宗武　二八二

ち

知蘊　一二五

忠海　一七八
中和門院　三〇一
親綱　一六七
親長　一〇五
智鏡〔園女〕
竹林院內大臣　一二四
遲塚麗水　三六九・三七一
千葉介貞胤　一〇九
丈草　二三四・二三五
陳元贇　二〇七・二〇九
陳國振　二七〇

つ

通齋　二七四
塚田十一郎　二三九
經嗣　一三三
經久　三〇四
常之入道　一五五

て

聽鶯莊主人〔七條愷〕　一九八
定家　七五・八四・八七・八八・九〇
貞室　二三一・二三五
寺島良安　二一三
輝資　一六七
天海〔慈眼大師〕　二二二・二二四・二二五
天智天皇　八二

と

東常緣　一八四
東福門院　一八四
戸川殘花〔安宅〕　三六四・三六七・三六九
　　三七〇・三七一
時範　三〇
常磐井入道前太政大臣　八四
德川家綱　二三九
德川家齊　二四八
德川家光　一八六・二二四・二四一
德川家康　一六八・一六九・一七一・一七五
德川齊昭　三〇一
德川光圀　二〇五・二〇六・二〇七
　　二〇八・二一〇
德川賴倫　三五七・三六六・三七一
德川賴宣　一八八・二一八
利家　一六八・一七〇
俊賢　五八
豐島景村　二四一
百百法眼俊道　二五七
鳥羽上皇　五四
登美宮吉子女王
〔德川氏文明夫人〕　三〇一
伴林光平　三一五
豐臣秀吉〔豐太閤〕　四六・一六七

な

仲實　六五
長東大藏大輔　一七二
中務　五九
中院通勝　一八五
中院通村　一八七
中鉢美明　三六九
中村敬宇　三一一
中村顧言　二〇八

中村傳九郎　二五三
長屋王　二六
中山信興　三四六
永井直勝　一八五
永井尚政　一八六・一八七
那波道圓　一八八・一八九・一九〇
成島道筑　二四三・二四四
成島柳北　三四〇・三四一・三四二・三四三
成通　三四〇
名和花隱〔廣瀨花隱〕　三六四
名和靖　三六四

に

西川求林齋　二三六
西野猪久馬　一八二
仁德天皇　七・九
仁如　一四〇・一四七
仁明天皇　二八・二九・三一・三四・四二・四三

の

宣胤〔中御門〕　一三五

教房〔一條〕　一四八

は

梅室　二九三
芳賀矢一　三六六
橋本關雪　三六七
芭蕉　三一六・三一七・三三五・三三七・三三四
畠中銅脈　二七〇
八幡太郎義家　七一
濱田道迪　一八八
華島雪亭　二九三
林愛作　三六九・三七一
林有章　三四八
林衡〔逃齋〕　二四七・二九四・二九六
林春齋　二一六
林道春〔羅山〕　一八五・二三三・二三四
林檉宇〔凱〕　二九四・二九五・三〇〇
原鏗桂　二五〇・三三一
晴季　一六七・一六九

ひ

東園基光　三六九
土方久元　三三一
雛屋立圃〔紅粉屋庄右衞〕　一九七・一九八
秀家　一六八・一六九
秀鄉　二〇五
秀次　一六七・一六九
人丸　四〇

ふ

兵衞與侍　一一九
平田篤胤　三一八
平田久　三三六
平野知秋　三三一・三三二・三三四
廣幡大納言　二七〇
廣瀨花隱〔名和〕　一八一・一八五

福羽美靜　三三〇
二川相近　三〇八
藤井竹外　二一〇
藤田東湖　三一七・三一八
藤原明衡　六一
藤原篤茂　六〇

藤原宇合　二
藤原兼經　八三
藤原公任　一八四
藤原公平　一〇四
藤原公宗　一〇五
藤原清輔　六三
藤原國綱　四七
藤原實資　四四
藤原惺窩　一七七・一八八
藤原隆資　一〇四
藤原親長　一〇五
藤原俊綱　三三
藤原俊家　六七・六八
藤原成範〔櫻町中納言〕　六八・六九・七〇
藤原不比等　二六七・二六八
藤原廣嗣　一六〇
藤原尙通　一七
藤原基經　一〇五
藤原師通　四九
藤原師實　五四
藤原良相　五四

藤原良房　四一・五二・五八
藤森弘庵　三一七
佛行坊　二四九・二五〇
船津靜作　三五六・三五七・三六三・三七一

へ

平城天皇　三七・二一〇
辨內侍　一一九

ほ

豐太閤〔秀吉〕　四六・一四〇・一六七・一六九
　一七二・一七三・一七五
北條貞時　九七
鳳朗　二九三
堀田正敦　二八三
細川勝元〔典氏〕　一三八・一四〇
細川潤次郎　三三五
細川忠興〔熊千代〕　一五一
細川幽齋〔藤孝〕　一五一・一五二
堀河天皇　六四・六五・六七
堀良山　二九三

ま

牧野毅　三一四
雅枝　一六七
正子內親王　六四
政宗　一六〇
雅實　五四
益田少將　一七二
增田長盛　一七二・一七三
增田繁亭〔金太〕　二八二
松平定邦　二八二・二八四
松平定信〔樂翁〕　二四二
松平專助　一八四・一九七
松永貞德　二一二・二七一・二九〇
松岡玄達　二五七
松岡恕庵　一七二
前田德善院　一七六
前田利長

三浦淨心　二五
三浦義村　九六
三館思孝〔花顚、介堂〕　一八三・二六四・二六五・二六六・二六七・二六八・二七〇・二七一・二七三・二七四・二八四・二八五・二八九・二九一・三三一
三館露香　一八二・二六六・二六九・二七〇・二七一・二七二・二七三・二七五
道家　八四
道長　五八
通村　一八七
光繼　六六
美津女〔杉本〕　二三三
光信　九八
水野總領事　三五九
水野忠順　三六四
水戸侯　二四一
皆川愚　二七〇
源清麿　三三二
源前秀　二七五
源時綱　四七
源俊頼　六三
源仲朝　八六
源光行　七三・七四
源義朝　二八
源頼朝　九五
源頼政　七一
源頼茂　七三・七四
御牧勘兵衛　一七二
宮川鐵次郎　三六九
三宅觀瀾　二一〇・二一一
宮崎玉緒　一八二
三好學　六六
む
夢窓國師　二三二・二三四
宗重　八八
宗良親王　一一七
宗弘　八八
村井吉兵衛　三七一
村上天皇　三五・三六・四〇
村上豊夫　三〇五
室田老樹齋　三四五・三四七・三四八
め
明慶〔鳴食〕　一四二
明治天皇　三三一・三五九・三六〇
も
持豊　二七四
基佐　一五五
基綱　九六
本居宣長　二七六・二七七・二七九・二八一
物部長眞膳連〔稚櫻部造〕　三〇六・三一八・三三三
や
師郷　一一
師忠　一四五
文德天皇　五五
也有〔横井孫左衛門〕　二六一・二六二・二六三
揚守敬　三四
簗珠院　二八
屋代弘賢　二九〇・二九一
安富軍八　二九一
安場保和　三四九
梁川星巖　一一〇
山浦環　三三
山縣蕪亭　二六九・二七二・二七四
山崎闇齋　二一一・二一三
山田耕農　三六八
山邊赤人　二〇・三三
山本直良　三六九・三七一
ゆ
行範　八五
よ
横田如圭　二九〇
義懷　五一
良經　三一七・三一八・六三
良寬　七七
吉田松陰　三六八
義詮　二三四
義敎　一四七・一四八
義政　三三一
吉道　二四〇・二四一・二四二・二四三・二四七
吉宗　三三〇
賴宣〔德川〕　二〇一・三五七
ら
賴杏坪　四五
賴山陽　四五
良辨　二三一
柳亭種彥　一〇・二一〇
履中天皇　三五八
リチャード・レイノルツ　一五三
良紀　三一七・三一八・六三
了玄　二五五
良哉　一四
良遍　七
れ
靈元法皇　二四八
冷泉定家〔定家〕　二四四
冷泉爲久　二四四
ろ
六條忠顯　二七七・二八〇・二八一
六如　一三六
わ
橫川　一三五
渡邊洪基　三五五・三五六
渡邊省亭　三六七
王仁　七・八・九

櫻の名目

あ

曉櫻　一八二・一八三・二一三・二八七・三三一
赤葉八重櫻　一二六
「曙」櫻　一八一、一八二・一八三・二八六
淺黄〔葱〕櫻　二〇四・二二八・二二九・二五八
　二六〇・二八七・二九七・三五四
旭日櫻　二〇二
東枝垂　三五五
東錦　三五五
敦盛櫻　三五五
天川　三五四
雨宿　三五五
嵐山櫻　一一八・二〇三・二一三・二二〇・三三〇・三五四
有明櫻　二〇四・二一三・二二九・二五八・二六〇・二八七・三五四

いゐ

生駒櫻　三三〇
伊勢櫻　一九〇・二二八・二五八・二五九・二八六
一葉　三五四・三六三
一文字櫻　二一三
絲括櫻　二一三・二六〇・三五四
絲櫻〔垂絲〕　六三・八二・八三・九一・一一四・一三九
　一四〇・一四一・一四二・一五六・一九〇
　一九九・二二四・二二九・二五八・二五九
　二七七・二九七・三〇〇
犬櫻　二二九・二六〇
家櫻　二二九
妹背櫻　二〇二・三三〇
入相櫻　二八七

う

鬱金櫻　二〇四
うず〔雲珠〕櫻　六二・一四四・二二九
薄墨櫻　二一三・二八七
渦櫻　三五五
婆〔姥〕櫻　一九〇・一九八・二二八・二五八
上溝櫻　二五八・二六〇

えゑ

枝櫻〔紋〕　二〇五
江戸櫻　二〇三・二一三・二二八・二五八
　二六〇・二六七・三三〇・三五四
江戸彼岸　二六七
江戸法輪寺　二一三・二五九
衞門櫻　二一九

おを

奥州櫻　二一三・二二八
遲〔晩〕櫻　八二・一〇六・一四八・二二九・二八四
大内山櫻　二〇四
大芝山　三五五
大島櫻　三三〇
大提灯　二一七・三五五
大毬　二一四
大南殿　三五五
大芳野　三五五

おまき櫻　一四五
小汐山　三五五
乙女櫻　二〇四

か

海棠櫻　一四五・二一三
香芬櫻　二一三
歌仙櫻　二三三
かにはさくら　六二
樺櫻　二一三・二二八・二二九・二六〇・二八六
鎌倉櫻　一二〇・二五八
寒櫻　三五五

き

菊櫻　二一三・二五八
菊枝垂　三五五
黄櫻　二五八・二六一・二九七
祇女櫻　三五五
衣笠櫻　二〇三・二八六・三三〇
牙櫻　三三〇
御衣黄　二〇四・二九二・三五四
桐谷　一二〇・一二一・一二二・一二三・一九〇・二〇二・二〇四
　二二九・二五八・二五九・二六〇・二六七・三五五
桐壺　二一四
麒麟　三五四

く

九曜櫻〔紋〕　二〇五
くゝり櫻　二五八
熊谷櫻　一九〇・二二九・二五八・二五九・二六七・三五四
雲井櫻　一一四・一四五
雲井櫻〔紋〕　二〇五
鞍馬山　三五五
車返〔御車返〕　一二〇・二一三・二一四・三五四
紅櫻　六一・八二
關山　三五四
元日櫻　二三八・二八六

こ

紅梅櫻　二二九
黄金櫻　三三〇
小菊櫻　二一三
苔清水　三五四
九重櫻　二一三・二二八・三三〇・三五五
小櫻　一四四・二一三・二二八・二五九・二六七・二八六
御座之間香　三五四
五色櫻　三五五
胡蝶櫻　二〇四
小毬櫻　二六〇
壽櫻　三三〇
木花　七
護摩櫻　二〇四
小町櫻　二二八
駒繋櫻　二一三・三六三
小綠櫻　二八七
金剛山　三五四
金輪寺　三五四
金玉櫻　二一七・二一八

さ

西行櫻　七一・二一三
逆手櫻　二一三・三五八・二六〇
左近の櫻　二七・七三・七六・一〇三・一〇六・三〇一

漣櫻　二八七・三三〇
薩摩寒櫻　三五五
殘雪櫻　二一三

し

秋色櫻　二三〇・三五五
四季に花咲く櫻　八二
したれ〔したり〕櫻　六三・八三・一四三・二一六・二二〇・二八六
信濃櫻　一三八
芝山櫻　一九〇・二一三・二五八・二五九・二六〇・二八六・三三〇
鹽竈櫻　一九四・二〇三・二二八・二二九・二五八・二六一・二八六・二九七・三三〇・三五五
猩々　三五四
上句　三五四
寂光寺　二五八
朱雀　三五四
述懷櫻　二一三
松月　三五四・三六三
白雲櫻　二〇三・三三〇
白雪櫻　三六三
素〔白〕櫻　二〇二・二一三・三三〇
白妙櫻　三五四
白華山　三五五
白普賢　三五四

す

墨染櫻　一一九・二二九・二三〇・二九七
墨染の櫻　四九
駿河臺香　三五四

せ

昭君櫻〔王昭君〕　二一三
雪山櫻　二一三
千里香　三五四

そ

索觀濱櫻　二一四
染井吉野　三四三・三五二・三六〇

た

泰山府君　七〇・一九〇・二六一・三五四
大師櫻　二二四・二二五
太申櫻　三五三
大膳櫻　三五四
瀧櫻　三〇二
瀧香　三五四
「玉」櫻　一八一・一八二・二八七
玉の緒櫻　二八六・三三一
手枕櫻　二八六
手弱女櫻　二〇二・三三〇

ち

中毬　二一四
兒櫻　二〇四・二一三・二二九・二五九・二六〇
地主の櫻　一五三・一五四・二八六
千本櫻　二一三・二五九
長州緋櫻　三五四
丁子櫻　三五五
提灯櫻　三一三・二六一

つ

筑波根〔突羽根〕櫻　二〇二・二一三・二八六・三三〇
爪紅櫻　二八六
艶櫻　二八六
貫之櫻　三三〇

て

手毬櫻　一九〇・二〇二・二一四・三五五・三六三
天狗櫻　二一三

と

常盤櫻　一六六・一八一・一八二・二八七
殿櫻　二〇四・二五八・二五九・二六〇
外山櫻　二一三
豐國櫻　二一三
虎尾櫻　一九〇・二〇三・二二九・二五九・二六一・二八六・二九七・三三〇

な

長崎櫻　二三七
名島櫻　二一三
撫子〔瞿麥〕櫻　二一三・三三〇
南殿　二一三・二五八・二六〇・二九八
南殿の櫻　二七・二八・三〇・三七・四〇・七三・七四・一〇三・一〇六
奈良櫻　三五四

に

庭櫻　六二・一九〇・二九七
香〔匂〕櫻　二一三・二六〇・二八六・二九七・三六〇
香毬　二一四

ね

寢覺櫻　二〇二・三三〇
練絹櫻　二一四

は

葉敷櫻〔紋〕　二〇五
旗〔機〕櫻　二九七・三〇二・三三〇・三五五
はつ櫻　二二八
花櫻　六二
箒櫻　三五四
羽二重櫻　三五五
早櫻　八二

ひ

檜扇櫻　三三〇
彼岸櫻　一四三・一九〇・一九八・二一六・二二四・二五八・二五九・二九七・三五五
彼岸枝垂　二二四・三五四・三五五
日暮櫻　三五五
緋〔火〕櫻　六二・二一三・二二八・二二九・二五八・二六〇・二九七・三三〇
常陸櫻　二一四
一木二木　二〇六
一重櫻　二〇〇
一重櫻〔紋〕　二〇四
人丸櫻　一四五・三五四
日見櫻　二三七
氷室櫻　一四四・一四五

ふ

府君〔泰山府君〕　二六一
福祿壽　三五四・三六三

普賢象櫻　一二六・一二七・一三五・一三六・一三七
一九〇・二〇四・二二九・二五九・二六〇
二八四・二八七・二九七・三三〇・三五四
普賢堂櫻　一三四・一三六・一三七・二〇二
富士櫻　一四五
富士山櫻　二〇二・三三〇
不斷櫻　一五九・二一三・二九七・三五五
冬櫻　三三〇

へ

紅枝垂　三〇三
紅毬　二一四
紅鵯　三五四
辨〔便〕殿　三五五・三六三

ほ

蓬萊山　三五五
鳳來寺　二一三
帆掛櫻　二一三
細川櫻〔紋〕　二〇五
細川香　三五四
帆立櫻　三三〇
牡丹櫻　二〇三・二九七・三五四
法輪寺　一八二・一八三・二一三・二五八
二六〇・二八七・三五五
本紅櫻　二一四

ま

眞櫻　二六〇
增山櫻　三五五
豆櫻　一四五

み

水分櫻　三三〇
御車返　三五四
御園櫻　一八二・一八三・二八六
水上櫻　三五四
水無月〔六月〕櫻　一四四・三五五
都櫻　三五五
深山隱　二一三
三吉野　一八二・一八三・二八六

む

紫櫻　三三〇・三五四

め

名月櫻　三五五

も

桃色枝垂　三三〇

や

揚貴妃櫻　一九〇・二〇二・二二八・二二九・二五八
二六〇・二九七・三三一・三五四
八重垣櫻　二一三
八重櫻　三七・八二・八三・八四・八五・八六・八七・八八
九一・一〇六・一二五・一二六・一四四・二〇〇
二〇三・二二四・二八六・三三〇・三六〇
八重櫻〔紋〕　二〇五
八重曙　三五五
八重一重　一二〇・二一三・二二八・二二九・二八六
山櫻　四一・六六・八二・九一・一九〇・二二四
山櫻〔紋〕　二二八・二六〇・二六七・二八六・二九七
二〇五

ゆ

夕榮櫻　二八六

よ

夜櫻　二〇二・三三一
芳野櫻　二五八・二五九・三五四
吉野枝垂　三五五
吉野山　二六〇

ら

廊間〔樓間〕櫻　二一三・二五八・二六〇・二八六
路頭櫻　二八六

わ

王昭君　三五五
若木櫻　二五九・二六〇・二九七
鷲尾櫻　一四八・二六〇・三五四

地名

（櫻花ニ關係ナキ地名ハ載セズ）

あ

櫻谷寺 二三六
淺草 二六・二七・二三六
淺草觀音 二三〇・二五四
飛鳥山 二三一・二四一・二四五・二四八・二六一・三一四
愛宕山 一九九
熱田 一七五
安土城 二三六
姉小路亭 一四三
粟田口 九〇・一四七・一九九
粟生光明寺 一九九
近江仁正寺 二八九
近江八幡 三二九
天川 三六七
荒川 三五五・三五六・三五七・三七〇
荒川の堤 三五二・三五三・三七〇
嵐山 八九・九〇・九一・九二・九三・一〇八・一五三・一八三・一九九
嵐山觀音堂 九二
青山權田原 二九二
青山長者ヶ丸 二九二
安養寺 一九九

い

伊賀ノ上野 二二一・二二二
伊賀國余野 三九
石切橋 三四五
石山寺 九九
伊勢 一五九・一六六
伊勢神路山 九四
市磯池 一〇
一乘寺 二〇〇・二四八
一乘の谷 一四二
一條院 五八
五辻 九〇
絲我山 二三
稻荷 一九九
岩倉 九〇・二〇〇
磐城國田村郡三春町 三〇三
石清水八幡 一九九
巖屋 二〇〇
磐余若櫻宮 九・一〇
磐余稚櫻宮 一〇・一一
飯田橋 三四四
飯田町二合半坂 二九一
引接寺 一三四

う

右近の馬場 一五三
歌の中山清閑寺 一四七
宇治平等院 一九九
宇都の山 九四
太秦 一四八
太秦廣隆寺 二〇〇
上池〔開成公園〕 三五〇
上野 一九八・二〇九・二二六・二二一・二二五・
上野清水堂 二二六・二二七・三三二・三五二
上野公園 二〇七
上野臺 一九八・三三二・三六二
上野山 二二三
梅津長福寺 一九八
雲清寺 二〇〇
雲林院 五一・五三・五四・五五・六二・八九・一三五

え

英（國） 三五八・三六二・三六三
英國大使館 三四七
永福寺 九五
江戸 二一四・二一七・二二〇・二二一・二二六・二二七・二三四・二四〇・二六一・二八三・三〇一・三五一
江戸川 三四四
江戸川橋 三四四
江戸城の壕 三四七
江戸築地五の橋 二八三

お

大阪の櫻 九
大塚 二八三
大谷勝久寺 一九九・二〇〇
大原 一〇八・二〇〇
大原勝持寺 一九九
大原野 九〇・一二七・一三〇・一五〇・一五三
御室 二〇〇・二〇一・二〇三
御室仁和寺 一九九
大井川 九二

か

開成池 三五〇
開成公園 三五〇
開成山 三四八・三五〇
江州安土城 二二六
高臺寺 一九九・二〇〇
江北村 三五一・三五七
高陽院 五一
高麗園 三五七
香具山 二一
柏木園照寺 二一九
鹿島神社 三一八・三一九
春日社 二〇〇
春日神社 三九・八六
春日野 二三
交野 五六・五七
革堂 五四・五五
河内國交野郡 五六
鷄冠木（カヘデ） 一九九
甲斐國 一五八
鎌倉 九四・一二一・一二三・一三七
上賀茂 二〇〇
神路山 九四
龜山 九二・九三
龜山殿 九二
加茂 二〇六
賀茂社 四四・四七
感應寺 二二〇
閑臥庵 一八一
寒松院 二二四・二二五
神田川 三四四
閑院南殿 七五

き

紀伊 二二

宜秋門　三一
喜藏院　二九九
北野　一九九
北山　六七・六八・八三・八四・八九・九〇・九三・九四・一〇五・一〇九・一二五・一〇〇
北山殿〔北山の第〕　一三三・一三四
貴船　一〇〇
清瀧　四五
清水　一四七・一五三
清水〔上野〕　二二一・二三一・二三六
清水觀音堂〔上野〕　二三三・二三〇・二三一
清水寺　一九九・一〇〇
京　八五・八九
京都帝國博物館　一五一
京極殿　九八
京都文錦堂　二六七
京都　一九〇・一九七・一九八・二〇〇・二一三・二三五・二四八・二五一・二五七・二六五
二六六・二七一・二七〇・二七一
京都市上京區平野宮本町　二〇一
桐ヶ谷　二三
祇園　三三一
祇園林　一九九
金玉山　一九九
金勝寺　二八四
金龍山淺草寺　二五五

く

久我〔こが〕　一九九
熊谷堤　二六八・二七五
熊谷町　二六九
熊野神社　二四一・二四二・二四三
熊本　一七五
鞍馬　六三・一四五・一五三・二〇〇
車田新田　二六六
黒谷　一九九
黒門　二三六・二三七
黒門前　一九九
光照院　一九九
光明寺　一四七・二二一
花頂山〔華頂山〕　一九九
月輪山　二〇〇
廣隆寺　二三三・二三五・二三二・二三五
寛永寺　二三一

け

建泰門　三一
ケント州　二六二
建仁寺　一九九

こ

小網町　二三一
小石川　二四四
興雲庵　一九九
興正寺　一九九
弘道館　二〇一
興聖寺　二六八・二七九・二八六・二八二・二八三・二〇〇
小梅村　二四一
後樂園　一〇五・一〇七・一〇一・二〇二
久我　一九九
小金井　二四五・二四八・二五八・二五九
觀音寺　二一六
觀音院　一五五
關西　二八四
觀勝寺　一九九
關東　二一〇

け

建泰門　三一
ケント州　二六二
建仁寺　一九九

こ

小網町　二三一
小石川　二四四
興雲庵　一九九
興正寺　一九九
弘道館　二〇一
興聖寺　二六八・二七九・二八六・二八二・二八三・二〇〇
小梅村　二四一
後樂園　一〇五・一〇七・一〇一・二〇二
久我　一九九
小金井　二四五・二四八・二五八・二五九
小金井橋　二四五・二四八・二五九・二七〇
五軒町　二四五・二四八
五智光院　二四七・二五八
近衛家の別第　一四一
郡山　二四九
近衛辻子　一四一
駒込傳中　二五五
子守明神　二六〇
子安觀音　二四四
衣河　一九九
金藏寺　一九九
金輪寺　二四二・二四四
金玉八幡宮　二一七・二一九

さ

齋院御所　西一五
鷺林寺　一九九
西行庵　一五五
西芳寺　二三一・二三四
西方寺　二〇〇
西園寺　九〇・九二
鷺ヶ森　一九八・二〇九
鷺ヶ森清涼寺　一九九
鷺ヶ森法輪寺　一九九
坂本　一九九
佐紀山　二一
さくらが嶽　二五五
櫻川　一五五・二六七
櫻が崎　二三五
櫻が岡　二三五
櫻木の宮　二三五
作樂神社　二三五
櫻田の谷　一八一
櫻之坊　二〇〇・二〇一
櫻町〔水戸〕　二三五
櫻本　二八四
櫻山　二六七
櫻井　一〇
櫻井町　二六七
佐保　二六
佐保の山　二一
作寶樓　二五五・二六
藏王權現　四一・五七・八一・一四〇
藏王堂　一九九
藏王窟　二九九
三銘寺　一九九
三寶院　一九九
三寶寺　二三五・二三四
山王墓〔上野〕　一九九
三會院
し
志賀　九四・一五二・一六一
志賀花園　八一
志賀の都　五一
仁壽　二七・六・二九・三五
榮慶殿　二一〇
自性院　一九六
詩仙堂　一九九
信機　二一六
忍ヶ岡　二四五
品川宿　二一七
品川御殿山

芝大佛 二二〇
澁谷金王八幡宮 二二七
下賀茂 二〇〇
下野宇都宮 一五八
白川〔京白河〕 五二・五三・五四・六三・八三 一九九・二八四
白河關 一五八
白子觀音寺 一五九
常光寺 一四八
聖護院村 二八八
常在光寺〔常在光院〕 一四六・一四七
靜寂院 一四〇
淨土寺 一四七
常寧殿 三一・三四
聖靈院 一二六
寂靜院谷 一四一
修學院離宮 二四八
修學寺 二〇〇
勝久寺 一九九
勝持寺 一二八・一五〇・一七七・一七八・一九九
新黑谷 一四七
新小金井 三四五
神泉苑 六・三二
眞如寺 一九九
神明山 一九九
新小川町 三四五・三四六

す

瑞西 三五七・三六三
朱雀院 五一
諏訪神社〔長崎〕 二三八
隅田川〔墨沱川〕 二二一・二三九・二四〇・二四二 三四〇・三四一
隅田川の堤 三四一・三四三
隅田の堤 二三九・二四八
墨染寺 一九九
摺鉢山 二二三・二三二
駿河 九四・一六七
隨身院 九〇
睡足園 二八八・二八九

せ

旌櫻寺 三二四
清閑寺 一四七
勢州白子浦觀音寺 一八一
西山寺 一五八
昭陽舍 三一
清涼寺 一九九
清涼殿 三一・三五・四二・五九
赤山 二〇〇
關屋 二三五
世尊寺 一一四
千光寺 一九九
淺間神社 七
淺草寺 二五四・二五六
千住町 三五二
善峰寺 一九九
禪佛寺 一二二・一二三
千本 九〇・一三六・二〇〇
千本の釋迦堂 一三六
泉涌寺 一九九
禪林 一九九

た

大覺寺 一九九
醍醐 四五・四六・八九・一七〇・一七一・一七三

醍醐櫻之坊 一八一
醍醐寺 四五・一四一・一七一・一八二・二六九
太子堂 一四七
大聖院 八五
大佛〔上野〕 二二七
鷹ヵ峰 二〇〇
高島屋〔大阪〕 三六七
鷹司家の邸 一四八
高間寺 一五六
高圓山 二一
高尾 一九九
瀧村 三〇三・三〇四
橘寺 一五六
龍田社 一七五
龍田山 二・一二二
玉川上水 二四五・二四六
玉園山 二三八
多武峯 二七七
たゆらぎの山 二二

ち

知恩寺 一二六
知恩院 一九八・一九九・二〇〇
知足院 三九
千鳥ヶ淵公園 三四四・三四七
持明院殿 八〇
長者ヶ丸の櫻園 二九二
長福寺 二〇〇
長樂寺 一九九

つ

鼓の浦 一六二・一六五・一六六
鶴岡 九六

て

帝國ホテル 三七〇
出羽の國 九四
天龍寺 一九九
天王寺五智光院 一二六

と

東叡山 二二〇・二二一・二二三・二二五・二二六・二三〇
東京 三四四・三四八
東京市 三四七・三四八・三五八・三五九・三六〇・三七〇
東京大學植物園 三五七
東京府 三四八
東宮の雅院 三一
東寺 一九九
東照宮 二二六
東漸寺 一九九
東大寺 四三・八六・二〇〇
東塔南谷榮光坊 一五七
等持院 一九九
東北院 五四・五五
東圓堂 三八
栂ノ尾 一九九
德林院 一九九
となせの瀧 二六八
遠江西山寺 一五八
富山市稻荷町 五〇

な

長崎 二三六・二三九
長谷 二〇〇
中の橋 三四五
勿來の關 七一

名古屋の城 一七五
梨壺 三一 八・九
難波 八・一〇・三
難波の宮 二六・二七
並木町 三六・八六・一三五・三三一・三六五
奈良 三元
奈良師範學校の庭 二六・二七・三六・八五・一〇五
奈良の京〔都〕 一〇九・一〇九
鳴瀧妙光寺 一九九
南葵文庫 三七・三八・三〇・三一・三三・三五・四四・四五・四七・四八・四九・五〇・五一・五二・五四・五五・五六・五七・五八・五九・六〇・六一・六二・六三・六四・六五・六六・六七・六八・六九・七〇・七一・七二・七三・七四・七五・七六・七七・七八・七九・八〇・八一・八二・八三・八四・八五・八六・八七・八八・八九・九〇・九一・九二・九三・九四・九五・九六・九七・九八・九九・一〇〇・一〇一・一〇二・一〇三・一〇四・一〇五・一〇六・一〇七・一〇八・一〇九・一一〇・一一一・一一二・一一三・一一四・一一五・一一六・一一七・一一八・一一九・一二〇・一二一・一二二・一二三・一二四・一二五・一二六・一二七・一二八・一二九・一三〇・一三一・一三二・一三三・一三四・一三五
南都 一九九
南陽寺 一四一

に

紐育 三六一
西新井 三三五
西岩倉金藏寺 一九九
西江戸川町 三四四・三四五
西賀茂 一〇〇
西山 一〇八・一三三・一七七・一九九・二〇六・二〇七
二尊院 九〇・一九九
日光 一九九
若王寺 一四七・一九九
如意輪寺 一一六
仁正寺 二九九
仁和寺 四四・一四〇・一九九・二〇〇・二〇一・二〇三・二〇四

ぬ

貫井橋 二四六
ぬたの山 一九六

の

野宮 一九九

は

寶積寺 一九九
寶幢寺 一九九
はこねの山 二三三・八三
泊瀬寺 一九六
八幡宮〔南都〕 二〇〇
八幡宮〔深川〕 三六一
ハドソン川 三元
花がきの庄 二〇〇
花園 九〇
花園殿 一三一・一三三
花の御所 一九九
花ノ寺 三五一・三三
花山 三三五・三三六
濱離宮 三一・一一〇
播磨 一七五
萬松寺 一七七

ひ

東洞院土御門殿の南殿 六六
東山 三五一・三三・三五・六八・一四七・一三五・一九一
毘沙門堂 九〇・一九九
肥前長崎 二六五
常陸櫻川 二四〇・二四七・二六四
常陸國 一三五
常陸國水戸 三〇〇
百花園 三四〇
白毫寺 一四七
平等院 一九九・二〇〇・二〇一・二〇二・二六八・三三一
平野 二〇一・二〇二・三九九・三三〇・三三一
平野神社

ふ

深川 二一七・三三四・三六四
深川入船町 二六三
深川八幡 二一七
深草 四九・五〇・一九九
吹上 二四〇・二四一
吹上御苑 三三五
福王寺 一九九
普賢堂 三七一・三六
富士山 七
富士見寶藏 二九一
伏見の家 三五一
藤杜 一九九
府中〔駿河〕 一六七
佛行坊 二四九

へ

平安城 二六・三二・三四・四一
米〔國〕 三五七・三五九・三六〇・三六二
遍照心院 一九九

ほ

豐國山 一九九
北米合衆國 三五八
ポトマック 三六一
ポトマック公園 三六〇
ポトマック河畔 三五九
法金剛院 二〇〇
法勝寺 四四・六三・八三・二三九
法窟寺 二一六
法輪寺 一八三・一九九
本覺院 二二四
本國寺 一九九

ま

愼尾 一九九
松カ崎 二〇〇
松尾 二〇〇
丸山 一九九

み

眉間寺 一五六
三崎 九六
水戸 三〇一
三春 三〇四・三〇五
壬生 一九九

む

向島 二三九・二四〇
向日明神 一九九
武藏國北豐島郡王子 二四一
武藏國多摩郡小金井村 二四五
陸奥〔國〕 三〇三
無量光院 二〇五

め

妙覺寺 一九九
妙光寺 一九九
妙心寺 一九九

も

木母寺 二四〇

や

靖國神社 三四四・三四七
八瀬 二〇〇
谷中感應寺 二二〇
山崎 一九九
山科 一九九
山城國宇治郡深草 四九
大和櫻井町 一〇
大和國眉間寺 一四二
山鼻 二〇〇
山室山 二八一・二八二
八牟知山 二〇六

ゆ

湯島 二二五
湯島天神社 二二五

よ

浴恩園 二八二・二八四
吉田 一九九
吉野〔芳野〕 七六・八九・九三・一〇六・一〇八・一一四・一一五・一一六・一一八・一五二・一五三・一五五・一五六・一六六・一六七・一八八・二〇〇・二三五・二五〇・二七七・二七八・三二一・三三一・三六七
吉野山〔芳野山〕 三〇・四〇・四一・六九・七〇・七六・八九・九二・九三・一一五・一一九・一六三・一六八・二一七・二三六・二四七・二五三・二六七・二七五・三二七
吉原 二三〇
四谷自性院 二二〇
余野 三九

り

龍安寺 一四〇・一九九
リーズ市約州大學校 三五八
リバサイトパアク 三六一
靈山正法寺 一九九
臨川寺 一九九
離宮 一九九

ろ

六圓 二八三・二八四
鹿苑寺 一九九

わ

王子 二四一
王子權現 二四五
往生院 一九九
若狹國 一一
若宮八幡 一九九
掖上ノ室山 一一
鷲尾 九〇・一四七・一四八
和州〔大和〕吉野 二〇〇
ワシントン市 三五九・三六一・三六二

ゐ

院の庄 一一二・一一三

ゑ

圓照寺 二一九
圓宗寺 四七
圓通寺 九〇
越前國南陽寺 一四二

越中國高岡 一七六

を

小倉山莊 九〇
小倉山 一九九
小鹽山 一七七・一七八・一九九
小鹽山勝持寺〔大原野寺〕 一二八
娘子塚 一五
小幡驛 二〇六
小原〔大原〕 一四八

購入
4713

昭和十六年五月五日印刷
昭和十六年五月九日發行
昭和十七年四月八日再版發行

櫻史全 ㊞ 定價五圓

著作者 東京市淀橋區上落合一丁目四七八番地 山田孝雄
發行者 東京市牛込區榎町七番地 福山秀賢
印刷者 東京市牛込區榎町七番地 新里銳三郎
印刷所 東京市牛込區榎町七番地 大日本印刷株式會社榎町工場
發行所 東京市淀橋區上落合一丁目四七八番地 櫻書房
振替口座東京一七二八五一番 會員番號一一一〇八二番
配給所 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

巡回文庫

金工史談

香取秀眞著

規格A5判六百五十頁
アート寫眞二百四十葉
著者自裝 定價拾圓 〒〇・一四

好なればこそ金工美術の道に分け入り、皇國美術の眞髓を極むべく、史を漁り、技を鍛へ、作品を分析する等、臺地の精進四十年、日本の國の寶を人に世に語り傳ふべく書積り、宛ら歷代文化の祕傳書たる性格を具有するに至つたのが本書である。正倉院御物、法隆寺藏納御物を中心に古寶珍什より成る口繪の壯觀また言はむ方なし。近代の名匠が後代にのこす名著。